

栃木県立文書館における学校支援事業

松本 一夫

1. はじめに

本館の重要な業務の中に、所蔵史料の閲覧対応と普及事業がある。しかし、このうち閲覧者は、ほとんどが研究者や学生であり、そのため実際のところ1日あたりの利用者数は、決して多くはない。また普及事業についても、これまで企画展、古文書研修会、歴史講座などを実施してきた他、年2回「文書館だより」も発行してきたが、こうしたものを利用する方々もある程度限られている。せっかく所蔵している史料が、必ずしもその歴史的価値に十分見合うだけの利用がなされていない状況が続いていた。

こうしたことから、本館では、平成14年度から所蔵史料を学校教育に活用してもらうべく、いくつかの新規事業を実施している。ここでは、その具体的内容を紹介していくこととしたい。

2. なんじゃもんじょ探検隊

平成14年度以来実施している小学校5・6年生を対象とした事業である。当時の職員（筆者の着任は16年度）が知恵を絞って、なるべく勉強という色合いを出さず、クイズやゲームを用いて楽しく文書館の仕事や役割を理解し、歴史への興味を喚起するために始めた、と聞いている。古文書と小学生という、一見甚だ距離のある存在どうしを結びつけるという試みに、実施前は職員の中にも反対の声はあったが、いざ始めてみて、参加した子供たちの生き生きとした表情や元気いっぱいの活動ぶりに圧倒される形となっただけではない。

小学生対象ということで、漢字だけの史料などは難しいが、例えばかな文字だけで書かれたような古文書を、彼らは持前の柔らかな頭脳で、まるで判じ物のように読み解くことができる。

なお、この事業は、夏休み期間中に数回実施（1回2時間半程度）し、毎年30名程



松本 一夫（まつもと かずお）：栃木県立文書館副主幹。史学博士。著書『東国守護の歴史的特質』（岩田書院、2001年）、『日本史へのいざない - 考えながら学ぼう -』（同、2006年）など。

度の参加者がある。ちなみに今年度の活動内容は、「電動書架を動かして文書館の中を探検する」「自分の花押をつくり、受付で書いた名前の下に記してみる」「宇都宮城と城下町に関するクイズを解き、絵図上でウォークラリーを行う」であった。

3. 『学校教材史料集 - 授業に使うとちぎの史料 - 』

既に本県では、『栃木県史』史料編・通史編計23巻が20年余り前に刊行されたが、学術的な見地から書かれた県史の内容と、小中高の授業内容との間には、相当なギャップがある。また県史の普及版や関連する概説書も出てはいるが、これらでも必ずしも十分とは言えない。

そこで本館では、平成16年度より、栃木県関係の史料を集めた標記史料集を刊行することとした。既にいくつかの県で、こうした史料集は刊行されていたが、これらを拝見すると、失礼ながら総じて難しく、実際に授業で使えるのかという疑問を禁じえなかった。形式は史料の写真と釈文、それに解説を付したもので、これでは教師に余程の力量がないと使いこなすことはできない。現に、某県で作成し、教師・生徒全員に配布した史料集について、ある教師の集まりで、利用したことがあるか尋ねたところ、答えは皆無であったという。

こうした史料集にしないために本館が考えたのは、その史料を用いた授業展開例（発問・指示などを含む）を付すことであった。こうすれば、実際に授業をつくるという点で、教師の負担は大幅に軽減されるはずである。発問内容などについては、形式的なものに陥らず、実際に児童・生徒が興味をもって取り組めるものかどうか、十分に検討した上で作成している。この点、本館は、常勤職員5名のうち4名が高校地歴公民科の教員出身の指導主事であるため、少なくとも高校の教育現場については、相当程度把握して作成することができている。

さらに、こうした展開例が形式的なものではなく、実用的であることを強調するために、紹介した史料を用いた教師の方々による授業の実践報告も掲載している。

この史料集の刊行は、昨年度で3冊目となり、県内の小中高の他、全国の関係機関への配布や全国歴史教育研究協議会における紹介などによって、その知名度は次第に高まりつつある。

4. 教員対象の事業

前記史料集は、より多くの現場教師に地域史教材を用いた授業を実践してもらうための一助として作成したものである。したがって、内容・構成にどれほど工夫を凝らしたとしても、実際に利用されるかどうかは、この冊子を手にした教師の気持・意志ひとつにかかっている。

そこで、この史料集を作成したわれわれ文書館職員の思いを、直接関心のある教師

『学校教材史料集』の内容

第1号 (平成17年3月刊行)	第2号 (平成18年3月刊行)	第3号 (平成19年3月刊行)
1 那須国造碑が建てられた頃 - 下毛野古麻呂と大宝律令 -	1 下野国分寺出土の文字瓦	1 たった2文字が歴史を変える - 飛山遺跡出土の墨書土器 -
2 頼朝と東国御家人の関係	2 長篠の合戦と下野武将 - 小山秀綱と織田信長 -	2 御家人宇都宮氏の所領支配 - 「宇都宮家弘安式条」を読む
3 中世下野農民の成長と領主の対応	3 戦国期農民の危機管理	3 獺(かわうそ)のいた風景
4 江戸時代の下野の産物	4 豊臣秀吉が宇都宮で行ったこと	4 初擦騒動 - 宇都宮藩明和元年の百姓一揆 -
5 江戸時代の農民の休日は何日か?	5 方広寺梵鐘と佐野天命鋳物師	5 新田開発をめぐる領主と農民
6 江戸時代の農民と学習	6 文治政治と「生類憐みの令」	6 村のきまりから見た農民の成長
7 江戸時代後半の農民と商店経営	7 往来手形から庶民の旅を考える	7 江戸時代の乳幼児手当
8 変化朝顔からみた江戸時代の庶民生活	8 朝鮮人参栽培と下野	8 「鎖国」中の海外情報
9 領主の課税強化と農民の対応	9 下野における近代医療の始まり	9 栃木の殖産興業事始め - 大嶮商舎 -
10 幕末期の商店	10 ペリー来航と地方への情報伝達	10 内国勸業博覧会と地域の産業振興
11 明治維新を考える - 太政官高札「五榜の掲示」・「地券」ほか -	11 戊辰戦争と下野	11 大正期における選挙
12 文明開化と明治の地方産業 - 「大日本博覧図」を読む - 実践報告1本	12 廃藩置県と県民の日 - 6月15日は何の日 - 実践報告5本	12 教科書の歴史 実践報告4本

の方々を知ってもらうため、本県の総合教育センターで開設している「土曜開放講座」に、枠を1日いただくこととした。ここでは、参加者に対し、地域史教材のつくり方や史料集の利用法などを説明する他、模擬授業を体験してその効果を実感していただいている。平成17年度より始めて今年度は3回目となるが、いずれも10数名の参加があり、「すぐに生徒に還元できそうなものがあり、とても楽しかった」「地域史料の活用の可能性の広さを実感した」などの感想が寄せられている。



今年度はさらに、この開放講座の関連事業として、教師の方々に実際に文書館へ来て、授業に使えるような史料を選んでいただく「教材開発ワークショップ」も実施した。2日間で計7名の参加があり、充実した研修となった。

5. 授業支援事業

児童・生徒にとって、教師の説明や教科書、写真などを通じて知る歴史は、それほ

ど身近なものとはなりにくい。しかし、自分たちが生まれ育った地域に残された実物の史料を実際に見、また触れることによって、その大きさや筆跡、紙質、汚れ、破損の具合など、本物だけが持つ様々な情報を得、その迫力を肌で感じてもらうことが期待できる。

このような考えから、本館では、平成17年度より職員が古文書を学校現場に持ち込み、担当教師とTT（チームティーチング）の形で授業を行う事業を始めた。その際、いわゆる出前授業として丸々1時間、本館職員が行うのではなく、あくまでも現場の教師にイニシアチブをとっていただくこととした。そして事前に打ち合わせを行うことで、この授業を単なるトピックに終わらせず、教師の授業計画の中に位置づけていただくようにしている。また、学校が外部講師を呼ぶ際に必要な書類上の手続きは、極力廃した。さらに本館の事業として職員が古文書を持参、管理するから、その扱いについて学校側の心配は不要となる。こうした手続き上の煩わしさをなるべく軽減することも、教師がより利用しやすくなる一助になると考えた。

さて、この授業支援事業は、平成17年度に小中5校で計10時間、翌18年度に小中高4校で計5時間行った。本年度も既に小学校1校で2時間実施した他、中学校では、われわれの念願であった研究授業でとりあげていただき、参観した20名余の教師の方々に古文書を用いた授業の良さをアピールすることができた。実際の授業では、特に小学生の反応が素晴らしい。多くの子供たちが100年以上も前の古文書を見たり、さわったりして生き生きとした表情となり、中には「うわーっ」という驚き、感嘆の声をあげる児童もいた。担当した教師の方々にも好評であり、リピーターとなっていたいている方も少なくない。



6. おわりに

栃木県では、「ふるさと学習」の推進に着手したところである。これは、栃木のふるさと文化（歴史、民俗、工芸、自然）の中から教材となりうる学習素材をデジタルコンテンツ化し、さらにそれらを用いた学習指導案のライブラリーをつくり、学校現場では「ふるさと学習マップ」などを作成していく、というものである。これまで述べてきた本館の学校支援事業は、こうした動きを先取りしたものではあるが、あくまでも本館で扱えるのは紙資料だけである。地域史（文化）教材となりうる素材は、他にもたくさんあり、今後、県内の博物館、資料館や埋蔵文化財センターなどの関連機関と協力して、学校支援の活動をさらに進めていきたい。